

豊潤でモダンな風

福井市郎、上山二郎

大槻晃実



1



2



3

- 1 福井市郎「第2回林間洋画展覧会」
1924年 ポスター
- 2 福井市郎《猫を抱く自画像》制作年不詳
アクアチント、紙 当館蔵
- 3 上山二郎《籠の果物》1922年
油彩、布 当館蔵

奈良に生まれた福井市郎（ふくい・いちろう／1893-1965）は、油彩や銅版画をてがけた人物で、1913年頃に芦屋浜へ移住しました。1925年から1928年までフランスへ渡り、藤田嗣治と交流します。帰国後は銀座資生堂で滞欧作品による個展を開催、1929年に国画会へ出品する一方、神戸の創作版画運動「三紅会」に参加し、川西英や前田藤四郎らとともに展覧会や講習会を開催しました。1935年以降は画壇から離れ芦屋の六麓荘で暮らします。この頃「神戸絵画館」という画廊を主宰し、1939年に佐伯祐三の未発表作品を大阪で展観しました。

福井は1922年と1924年に自宅の庭の松の木に作品をぶら下げて展覧する「林間洋画展覧会」を開催します。油絵を中心にエッチングやモノタイプの版画作品を野外で展示、風変わりな発想の本展は好評を博したようです（『大阪朝日新聞』大正13年11月9日）。

時を経た1950年代、芦屋公園の松林を背景とした野外展が開催されます。それは、1955年に芦屋市美術協会が主催となり開催された「真夏の太陽にいでむモダンアート野外実験展」と1956年に開催された具体美術協会主催による「具体野外美術展」でした。いずれも吉原治良の発案による両展覧会は、1954年に結成された具体美術協会の重要な活動の一つとして記憶されます。

吉原が大阪から芦屋へ移住したのは1925年ですが、それ以前から親族が住んでいた芦屋を訪れていたと考えられ、「林間洋画展覧会」を直接見ていないにしろ、当時の新聞記事を目にしたり、移住後に交流をもった福井から展覧会を知った可能性は少なくありません。自然を会場にした展覧会が時代を経て開催されたことは、風光明媚な芦屋という地域性と新しいものを積極的に取り入れながら発展してきた文化的背景における賜物だったと考えられます。

東京に生まれた上山二郎（かみやま・じろう／1895-1945）は、川端画学校で藤島武二に師事、1921年に渡仏し藤田嗣治のもとで制作に励み、1922年と1923年にサロン・ドートンヌで入選します。フランスで活躍の兆しが見え始めた矢先、1923年に発生した関東大震災の知らせを聞いた上山は翌年帰国、福井市郎をたよって芦屋へ移住しました。

後に抽象絵画のパイオニアとして知られるようになる長谷川三郎は、高校生の頃より折に触れて上山の自宅を訪れ、当時のパリの状況を聞いていました。長谷川は信濃橋洋画研究所の仲間とともに結成していた「白象会」の同人誌で上山の作品を高く評価しており、尊敬する画家の一人であったことが窺えます。

上山は1924年の第11回二科展に入選するなか、翌年再びフランスへ渡り藤田と交流を深め、サロン・デ・ザルティスト・ザンデパンダンやサロン・ドートンヌなどで発表しました。

1927年に帰国し再び芦屋へ戻った上山は22歳の吉原と出会います。上山の自宅を度々訪問した吉原は、自宅2階のアトリエでパリの話を聞いたり上山の新作を見せてもらうなど交流を深めました。後に、上山は東郷青児や藤田嗣治を吉原に紹介します。吉原が藤田に自作の批評を仰いだ際、「ひとのまねは、いけないよ」という指摘をもらったといい、吉原の人生の中で重要な指標となりました。

「私は一度も上山さんを先生呼ばわりしなかったけれど、私の生涯で最も大きな影響を受けた人はやはり上山さんをおいて他にはないと思っている」と吉原は思い出を語っています（『わが心の自叙伝』神戸新聞1967年6月18日）。

長谷川と吉原にとって、福井や上山と過ごした日々は学びと成長の重要な時間でした。芦屋は多くの作家たちにとっての交感の場でもあったのです。

（おおつきあきみ 芦屋市立美術館学芸員）

〔参考〕

『没後20年－吉原治良展－』1992年、芦屋市立美術館
『芦屋の美術 大正・昭和・平成』1993年、芦屋市立美術館
『知られざる画家 上山二郎とその周辺』1994年、芦屋市立美術館
『日本抽象のパイオニア 長谷川三郎』2009年、明石市立文化博物館